

構成的グループエンカウンターを用いた小学校低学年における学級作り

—— 学校生活の基礎基本を楽しく身に付けるために ——

秋田市立八橋小学校 教諭 長尾直子

一．はじめに

現代の子供たちは、学校生活にストレスを感じており、それが不登校、いじめ学級崩壊などの様々な問題を起こす原因になっていると言われている。このような混乱が起こるのは、人間関係を結ぶ力が不足しているためではないかと考える。私は、学級生活の基礎・基本は人間関係づくりではないかと考える。

今年度、小学校一年生を担当している。小学校に入学してくる子供たちは、学校生活に大きな希望と、期待をもっている。入学式から二、三週間たつと、人間関係を結ぶ力が未熟であるために様々なトラブルが起こってくる。また、対人関係に不安を感じたり緊張が強くてなかなか友達ができないでいる子供も多い。人間関係は子供同士群れて遊ぶことの中で学んでいくのであるが、日頃子供たちを見ているとそれ以前の問題で、友達の作り方や誘い方も教えなければならないのかと感じたこともしばしばあった。そこで、対人関係や集団生活のマナー（ソーシャルスキル）を学級の子供たちと共有し、友達と一緒に遊んだり勉強したりすることの楽しさを体験してほしいと考えた。

低学年の子供が身に付けなければならないソーシャルスキルは多いが、集団の中で体験しながら身に付けた方が、効果が上がるのではないかと考えた。

この実践は、ソーシャルスキル教育を意識した構成的グループエンカウンターを使って学級づくりを試みた実践である。

二．研究方法

子供たちが、「学校が楽しい」と感じる時は、学校・学級生活に満足している時であると考え。子供たちの生活の場の中心は学級であるので、学級生活に満足感を得るために、次の三つのことを念頭において計画を立てた。

1. 安心感がもてる学級

対人関係・集団生活のマナーを共有するための活動を取り入れた。これがソーシャルスキル教育にあたる。人間関係に関する具体的なコツや技術のことをソーシャルスキルという。友達との関係が良好な子供はソーシャルスキルを適切に発揮している。ソーシャルスキル教育というのは人間関係に関するノウハウを教えることである。このような教育をすることは、子供たちの個性を奪うことだという批判があるが、ソーシャルスキルを身に付ければ、相手の気持ちを理解でき、自分の思っていることを的確に伝えることができるようになるので、むしろ個性を発揮するための道具を身に付けたことになるのではないかと考えた。良好な人間関係をつくり、保つための知識と具体的な技術やコツには基本として十二の技術があるが、ここではその中の「あいさつ」と「上手な聴き方」にしぼって繰り返し指導した。次の流れで行った。

インストラクション・教えられて「なるほどやってみよう」

モデリング・まねしてみよう「やれそうだな」

リハーサル・練習してみよう「なんとかできるかな」

フィードバック・認められて「これからもやってみよう」

2, 認められたいとう欲求を満たす学級

「自分は認められているんだ」と自覚し, その心地よさを味わってほしい。認められていると自覚している子供は自分を大切にする。自分を大切にすることは, 他人のことも大切にすることではないかと考えている。そのために, 教科・道徳等で認められる場面を設定するのはもちろんのこと学級活動等で構成的グループエンカウンターを取り入れた。次の流れで行った。

インストラクション(これから取り組む活動の目的を知る)

ウォーミングアップ(メンバーの緊張をほぐす活動をする)

エクササイズ(心理的成長を意図して作られたグループ体験の課題)

シェアリング(グループ体験を終えての感情や思いを分かち合う。振り返り)

3, 学級の現在地の把握

ソーシャルスキル教育や構成的グループエンカウンターなどのグループ体験を学級で行う場合に教師は, 学級の子供たちの実態や学級集団の状況を把握しておかなくてはならない。これを「学級の現在地」という。子供や学級の日常的な観察と合わせて, 子供の内面を調査する尺度を利用するとより, 学級の現在地を把握しやすくなる。ここではその尺度として岩手大学助教授河村茂雄先生の開発したQ-U(学級満足度尺度)を使った。小学校一, 二年生用は標準化されたものはないので「Q-U実施・解釈ハンドブック・小学校用(図書文化)」を参考にしている。Q-Uはアンケートの結果をもとに子供が学級にどのくらい満足しているかを測る尺度である。結果は承認得点(どのくらい認められているか)と被侵害得点(いじめや悪ふざけを受けているという思い)の二つを組み合わせで測定する。測定したものは「学級生活満足群」「非承認群」「侵害行為認知群」「学級生活不満足群」の四つに分けられ, 座標軸にプロットされる。視覚的にも見やすく個人と学級の両側面を把握できるという利点をもっている。短時間で実施・集計でき, 変化も見やすい。この結果を見ながら目的地(この学級をどのような学級に育てたらよいか)も設定できるし, 必要なエクササイズも選択できる。

三. 研究の実際

1. 構成的グループエンカウンターとソーシャルスキル教育の内容とねらい

構成的グループエンカウンターは集団体験を通してリレーション作りと自己発見をねらっている。これは人間的な自己成長につながる。リレーションとは, 良い面も悪い面もふくめての人間同士の感情交流のことである。構成的グループエンカウンターには二本の柱がある。「エクササイズ」と「シェアリング」である。ここにはショートエクササイズと中心エクササイズのみ載せてあるが, エクササイズを行った後必ずシェアリングを行っている。シェアリングでは, エクササイズを通しての気づきを分かち合い, ねらいを定着させる働きがある。エクササイズは, 心理面の発達を促すための課題であり, 自己理解, 傾聴, 自己主張, 自己開示, 信頼体験などの種類がある。

2. 実践例

実践例 1

題材 ありがとうかあど（七月実施）

ねらい

- ・ 友達の小さな親切に気づき，感謝の気持ちをもつ。（他者理解）
- ・ 自分の行為が受け入れられていることの喜びを味わう。（自己理解）

展開

ウォーミングアップ（十分）

ひたすらじゃんけん・・・なるべくたくさんの人とじゃんけんをする。

インストラクション（五分）

エクササイズの説明をする。

エクササイズ（十五分）

「ありがとうかあど」（七月実施）

ありがとうカード（資料3）を一人に十枚配る。

友達に親切にしてもらったこと，優しくしてもらったことなど思い出してカードに書く。

まず隣同士でカードを書き交換し合う。

次に四～五人のグループでカードを書き交換し合う

最後にクラス全員の顔が見えるように机を並べてカードに記入する。

記入し終わったら相手に渡す。

もらったカードをじっくり読み，感想を発表する。

シェアリング（十分）

インタビュー形式で気持ちを聞く。

まとめ（五分）

最初はなかなかカードを書けなかったが，だんだん要領が分かってきた。友達からカードをもらおうと子供がうれしそうにする。「先生，このカードうちで書いてもいいですか。おかあさんにあげたいんだ。」「先生にもありがとうカードあげるよ。」などと活動に広がりを見せた。このようなエクササイズは機会を見つけて繰り返しやっていくべきであると感じた。低学年には，日常生活に生かし継続的に行うことができるものの方が効果が上がるのかもしれないと思った。シェアリングの時，インタビュー形式でできるだけたくさんの子供におもちゃのマイクを向けるという方法をとってみた。「わたしにこんなに友達がいるとは知りませんでした。」「たくさんカードをもらってうれしいです。」「お返事を書けばよかったです。」などとたくさん気づきを聞くことができた。この活動により，低学年なりに自分の知らない自分のよさを見つめることができ，友達に認められることの心地よさを感じ取ることができた。

実践例 2

題材 上手な聴き方「そうだねゲーム」1 - (1) 基本的生活習慣

ねらい

- ・聴き方の基本は、態度で受容的に聴いていることを表現しながら聴くことである。受容的に話を聴いてもらう心地よさを体験することで、その大切さを理解する。

獲得目標とするスキル

- 相手を受け入れながら聴く。(うなずく)
- 相手の目を見ながら聴く。
- 最後まで聴く。
- 笑顔で聴く。

展開

ウォーミングアップ(十分)

せかいのあいさつ・・・なるべくたくさんの人とあいさつをする。

インストラクション(二分)

「そうだねゲーム」の目的を説明する。

モデリング(十五分)

二人組を作る。

一人が教室にあるものを指さし、「あれは時計だね。」などと言う。もう一人は「そうだね。」と答える。

交代して行う。

次は相手を見て、うなずきながら「そうだね」と答えるようにして繰り返す。

リハーサル(十分)

「わたしは体育が得意です。」と自分の得意なことなどを話し、相手が「そうだね。」と答える。

マイナス面は取り上げないよう話す。

フィードバック(三分)

「そうだね。」と答えてもらった時、どんな気持ちがあったかインタビュー形式で聞く。

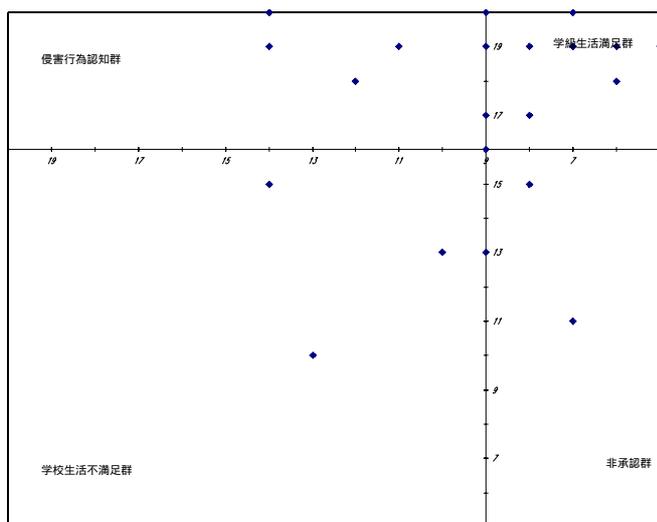
振り返り用紙に記入(五分)

振り返り用紙を見てみると、四つの獲得目標スキルに関してほぼ全員がよくできたとして自己評価していた。また、25人中22人が「上手な聴き方がよく分かった」と評価しており、3人が「大体分かった」と評価していた。自由記述欄より、「みんなにここに笑ってくれたからもっともっとやりたかった。」「友達が増えたような気がして楽しい。もっとやりたい。」「みんなと前より仲良くなれた。またやりたい。心が温かくなった。」というようなプラスの気づきが見られ、この活動によって人間関係を結ぶためのソーシャルスキルが低学年の子供なりに理解されており、子供同士のつながりを深めるきっかけができていることが分かる。

3. Q - Uの利用

学級の現在地を把握し、エクササイズの効果を確認するために6月、7月、10月、12月の四回調査を行った。6月は入学後二か月の学級の状況を知るため。7月は「ありがとうカード」実施後の調査。10月は全校縦割り活動など大きな行事を行った後。12月は一・二学期間エクササイズを行った後の調査である。

6月



入学して二か月，ようやく学校生活にも慣れてきた。友達関係も徐々にできつつあるが，なかなか緊張がほぐれず，友達のできない子供，休み時間にぼんやりしている子供がいる。また友達のことを考えない自己中心的な言動も目立つ。授業中も集中力がない。あいさつをする，友達と関わる，話を聴く，などのソーシャルスキルを身に付けるようにしていきたいと考えた。

各群の子供の中から気になる四人の子供についての対応を述べたい。

非承認群の12の女子であるが，入学式の時から私にまとわりついてきたり，二人で話をしたがったり，友達に意地悪なことを言って泣かせたりしていたので注意することが多かった。家庭環境のことも合わせて考えると寂しい気持ちをもっていると考えられるため，責任ある仕事をもたせ会話の機会を増やそうと考えた。朝の連絡係を頼み，私との会話の機会を増やしてみた。

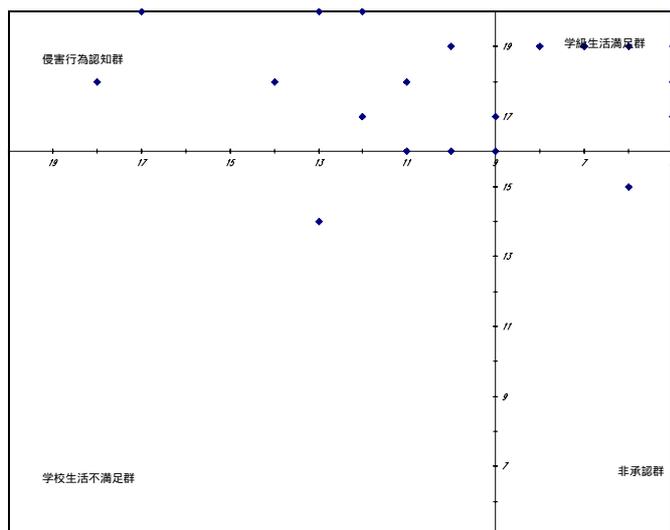
非承認群の6の男子であるが，何をしても人と同じ速さでできることがなく，一步遅れる。そのため注意をうけることが多かった。特に目を配り，しかるのではなく励まし，みんなと一緒にできた時には褒めるようにしてみた。

学級生活不満足群の21の女子であるが，学区外からの通学である。始業時間ぎりぎりに自動車で校門まで送られてくるので通学途中に友達との関わりもなく，なかなか友達もできなかった。休み時間もぼつんと一人でいることが多い。学校帰りも学童保育まで一人である。また，「みんなが，遊んでくれない。」「トイレにだれもついていってくれない。」などの幼い言動も目立った。そのため，他の子供も交えて一緒に遊んでやったり，登校時声をかけてやったりするようにしてみた。

学級生活不満足群の9の男子。私の指示が通りにくい。遊んでいる時他の子供たち言っていることも理解しにくい様子であった。そのためトラブルも多く，遊びから外されることもしばしばあった。授業中私の話が理解できないので学力も低い。このままではいじめの対象になりかねないので，少しのことで褒め，「あなたは大事な存在。」ということをお願い続けることにした。

また，侵害行為認知群の子供が多い。この子供たちは，活発であるが苦手なことがあると保健室に行きたがったり，頭痛，腹痛を訴えたり，自分でもたたいっているのにたたかれたと訴えに来たり，自分勝手言動が目立った。一対一で話をよく聞いたり，友達の気持ちを考えるように個別指導をしてきた。

7月



6月に比べると全体的に承認得点の向上が見られた。七月の中心エクササイズ「ありがとうカード」の効果が感じられる。しかし、侵害行為認知群の子供が増えてしまった。資料6のような分布をする時には、子供が学級のルールを守らず、自分勝手な行動をとって友達にいやな思いをさせている可能性があるのだが、私の観察によると、そのような傾向は見られなかった。むしろ、深い友達関係ができつつあり、友達と関わるには自分勝手に許されないということが分かってきて、そのためにつづり合っているのではないかと

考えられる。さらに友達と関わる事の心地よさを体験することが大切であろう。学級の様子はだんだん落ち着いてきた。

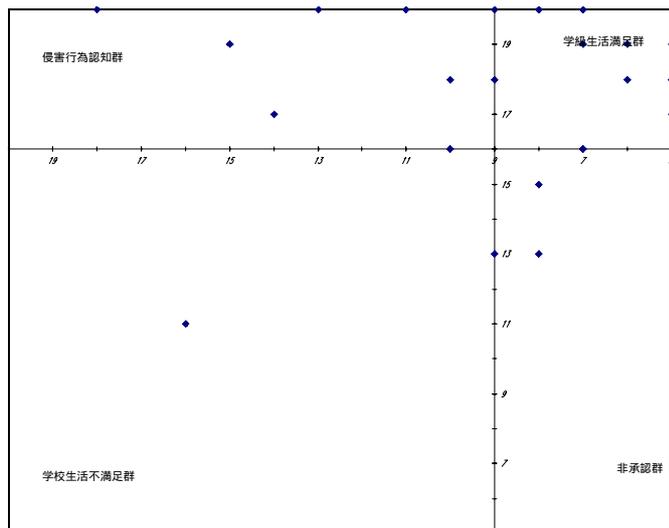
12の女子。非承認群から侵害行為認知群へ。承認得点が上がっている。友達と関わりができてきたことでストレスを感じて、意地悪なことも言うようになってきているようなので、友達の気持ちを考えるように個別指導するとともに、自分に自信がもてるよう、得意なことを探していきたいと考えた。

6の男子。承認得点が上がってきている。声をかけ続けてきた成果が上がってきた。しかし、行動には変化がない。

21の女子。不満足群から侵害行為認知群へ。友達ができつつあり、様々な子供と関わりができてきた。自己中心的な言動がまだあり、時々泣いているので個別対応を続けていった。

9の男子。承認得点は上がってきている。なかなか友達ができない。しかし、本人はあまり気にしていない様子である。引き続き褒めるよう心がけていった。

10月



学級生活満足群の子供が増え，学級としてまとまりが出てきた。授業中も落ち着いて作業に取り組めるようになってきた。話の聞き方はまだ身につけておらず，注意することが多い。

12の女子。特に変化がない。学級の中に仲のよい友達がいな。グループ活動をさせると誰とでもできる。わがままも言わなくなってきた。自分から声をかけ，遊びの仲間に入れるようにさせたい。

6の男子。承認得点が上がった。行動には依然変化が見られない。このころから，突然友達をけったり，たたいたり，ものを投げたりするようになった。あまり行動について注意されるのでストレスを感じているのかもしれない。保護者と連絡を取り，話し合った。自信がもてるように得意なことを見つけていかなければならないと感じた。

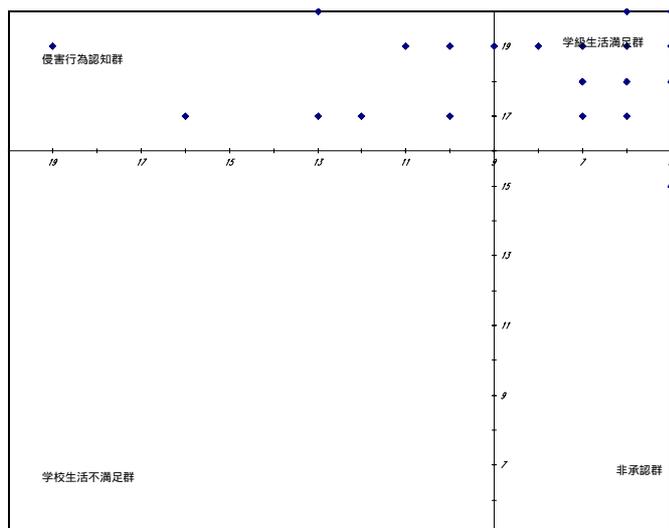
21の女子。学級生活満足群へ移動。学級の中で満足しているというよりも，学校行事で上学年の子供と深く関わり，声をかけてもらう心地よさを感じた。活動以外の場所でも自分から上学年の子供に進んで声をかける積極性が出てきた。授業中やエンカウンターにおいてもよい気づきをするので，大いに褒めた。

9の男子。承認得点が上がった。友達との関わりも大分できてきた。私の指示も通るようになってきたが，自分の思い通りにならないことも出てきて，不平不満ももらすようになってきた。

17の女子が学級生活不満足群に入ってきた。このころ学習していた算数に苦手意識をもっていた。学校は大好きと言っていたので，いじめも心配したがその傾向は認められなかった。仲のよい友達がいなくて休み時間は一人でいることが多い。算数の個別指導をし，隣の座席世話好きの女の子にしてみた。気をつけ目を離さないようこころがけた。

16の女子は学級生活満足群にいるが，不登校傾向が出てきた。満足群にいる子供だからといって安心せず，配慮が必要であると感じた。仲のよい女の子と協力して声かけを続け，時には一緒に遊んだり仕事を頼んだりしていった。

12月



承認得点が向上し，学級生活満足群が増加した。学級はとても落ち着き，話を聞く姿勢もよくなり，集中力も出てきた。休み時間も仲良く遊んでおり，トラブルも自分たちで解決しようという意欲が感じられるようになってきた。困っている友達には優しく声をかけたり，私に教えにきたりできるようになった。

12の女子。学級生活満足群へ移動。絵が上手であることを褒められたり，なかなかできなかった計算ができるようになったり，自分に自信が出てきた。今後も目を離さず見ていきたい。

6の男子。満足群へ。夏休みに書いてきた絵がコンクールで入賞した。表彰式に参加しそのことを得意気に話していた。自信がついたようだ。廃品を利用して自分で作ってきたこまが学級で大流行し，そのことで友達関係も安定してきた。

21の女子。侵害行為認知群へ。やはりまだ友達が自分の思い通りにならないと言う不満がある。また，渋滞などで遅刻するため朝のスタートが遅れるということでイライラも感じている。行動には成長が見られるようになった。例えば，隣に座っている子供がぼんやりしている時に教科書を開いてやったり，声をかけてやったり，ものを拾ってやったりまわりに目がいくようになったということ。ひとつひとつの優しさを大いに褒めてやりたい。

17の女子。算数の苦手意識がなくなり，できてうれしいと満足そうになった。友達関係はまだうまく結べていない。今後も目を離さず見守っていきたい。

五．成果と課題

1．成果

安心感をもてる学級づくりについて。ソーシャルスキル教育を行うことによって友達同士のつながりを結ぶきっかけとはなったようだ。また，自分のことばかりでなく，友達の言葉に耳を傾けたり，手伝ったり，仲良く遊べるようになったことなど，行動からその様子がうかがえる。

認められたいという欲求を満たす学級づくりについて。授業中の子供たちの様子を見てみると何を言っても認めてもらえる雰囲気がある。冷やかしてではない笑いがあるし，「いいね」と私が言う前に褒める子供もいるし，一人一人を大切にしようとしている。Q-Uの結果承認得点向上している。

子供たちが，学級作りをする上で構成的グループエンカウンターを用いたわけであるが，エクササイズを通して子供同士のつながりが強まり，何を言っても認めてもらえる安心感のもてる学級ができたと感じた。

低学年の子供にとって，体を動かし，友達とふれあい，そのことによって気づきが生

まれるエンカウンターは低学年の学級作りに有効な手段であった。

シェアリングが大事だと感じた。シェアリングとは分かち合いのことである。自分の思っていることを話すことで認められるうれしさを味わうことができた。また、聞いている子供たちも自分の気持ちと比べながら聞くことができた。シェアリングによってねらいが明確化するし、定着させることができる。気づきや思いを分かち合うことは集団でなければできないことである。

2. 課題

安心感のもてる学級づくりについて。Q - Uの被侵害得点の向上が見られなかった。計画が学級の実態に合っていなかったためである。Q - Uの結果を生かし、修正することが必要であった。

エンカウンターを学級活動、道徳等の年間指導計画に組み込んだり、教科の中で取り扱えるようにしていきたい。

六. おわりに

学級の子供に「学校楽しい？」と聞くと「うん。楽しい。」と答える。「どうして」と聞くとこんな答えが返ってくる。「あのね、友達がいっぱいだし、たしざんやひきざんができるようになったし、漢字だって書けるようになったんだもの。」つまり、子供たちの楽しいの規準は人間関係と、勉強なんだな、と感じる。人間関係は「生きがい」と「ストレス」が背中合わせになっている。それでも人間関係を結ぶのは「生きがい」の部分の大切さを我々が体験的に分かっているからである。しかし、現代の子供たちは「生きがい」の部分を経験的に分かっておらず、傷付けられるのを恐れるので人間関係から距離をおこうとする。子供たちに「生きがい」の部分を知ってほしいと願い、実践を積み重ね、よりよい方法を探っていきたいと考えている。

< 参考文献 >

- ・ 國分康孝監修 岡田弘編 1996：エンカウンターで学級が変わる 小学校編 part 1 図書文化
- ・ 國分康孝監修 國分久子 岡田弘編 1997：エンカウンターで学級が変わる 小学校編 part 2 図書文化
- ・ 國分康孝監修 河村茂雄 朝日朋子 國分久子編 1999：エンカウンターで学級が変わる 小学校編 part 3 図書文化
- ・ 國分康孝監修 小林正幸 相川充編 1999：ソーシャルスキル教育で子どもが変わる 小学校 図書文化
- ・ 國分康孝監修 林伸一 飯野哲朗 梁瀬のり子 八巻寛治 國分久子編 1999：エンカウンターで学級が変わる ショートエクササイズ集 図書文化
- ・ 國分康孝監修 林伸一 飯野哲朗 梁瀬のり子 八巻寛治 國分久子編 2001：エンカウンターで学級が変わる ショートエクササイズ集 part 2 図書文化
- ・ 河村茂雄編 2001：グループ体験によるタイプ別！学級育成プログラム 小学校編 図書文化
- ・ 田上不二夫監修 河村茂雄著 H11：たのしい学校生活を送るためのアンケートQ - U 実施・解釈ハンドブック 小学校用 図書文化